京都大学言語学懇話会
2018 年度 発表要旨

例会報告

第 106 回例会

日時・場所　2018 年 4 月 7 日(土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目　「ソシュールと比較言語学」

吉田　和彦 (京都大学)

「方言から言語記述を模索する：ドホイ語の音韻を事例として」

稲垣　和也 (南山大学)

第 107 回例会

日時・場所　2018 年 7 月 21 日(土) 13:30-16:45 於文学部校舎第四講義室

発表題目　「イロカノ語の複動詞構文の下位クラスと事象の分割」

山本　恭裕 (日本学術振興会 / 京都大学)

「現代日本語共通語における主節末尾の『た』の擬似パーフェクト性」

定延　利之 (京都大学)

第 108 回例会

日時・場所　2018 年 12 月 1 日(土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目　「古代ギリシア語諸方言に現れる従属接続詞の用例と方言超越的定型表現」

南本　徹 (京都大学)

「トカラ語の文献言語学研究」

Adam Catt (京都大学)

ソシュールと比較言語学

吉田 和彦

フェルディナン・ソシュールが共時言語学研究の将来に向けて示した指針、および関連諸分野に与えたその影響については、言を俟たない。一方で、比較言語学の発展においてソシュールが果たした役割と彼の死後に喉音理論（laryngeal theory）として確立したソシュール理論のその後の展開については、専門家以外にはそれほどよく知られていないように思える。膨大な文献資料を整理したうえで、それまで再建されていた祖語の母音交替の不規則性を内的再建法の適用によって統一的に説明しようとしたソシュールの試み（『印欧諸語における母音の原始組織に関する覚え書』1879 年）は、個別的な対応の解釈の寄せ集めではなく、構造体としての祖語の再建であった。この点で、実証的な立場から個々の形式の歴史的解釈に終始する青年文法学派の研究とは根本的に異なっていた。

ソシュールが提案した見方（部分的な変更がメラーによってなされた）によれば、印欧祖語にはソナントのように機能する自律的な音素（coefficient sonantique）が存在した。この音素は分派諸言語において完全に消失したと考えられていたが、ソシュールが亡くなってから 2 年後の 1915 年に解読されたヒッタイト語に部分的に保存されていることが明らかになった。こうして資料的裏付けが得られたことにより、ソシュール理論の正しさは立証された。彼の理論は後に喉音理論として確立した。その後今日に至るまで、喉音理論は印欧諸言語にみられるさまざまな不可解な音韻的および形態的な問題の解明に向けて、重要な役割を果たすようになっている。

たとえば、ゲルマン語派とバルト・スラブ語派にはそれぞれ語末音節縮約とレスキーンの法則を受けない点で不可解な形式がある。たとえば、ゴート語 ga-leiko /-oː/ ‘like, similarly’（本来は単数奪格）、リトアニア語 viĩko /-oː/ ‘of a wolf’（単数属格。本来は単数奪格）である。ゴート語とリトアニア語のあいだで同じ文法形式がまったく並行的なふるまいをすることから、それぞれの語派にみられるこれらの現象は統一的に把握する必要がある。リグ・ヴェーダにみられる韻律の現象から、印欧祖語の単数奪格は母音間に喉音を含む *-oHed という語末形式が再建される。従来の考え方とは逆に、ゲルマン語派の語末音節縮約およびバルト・スラブ語派の acute 付与の段階では、母音間の喉音がまだ保持されていたと考えれば、ゴート語 ga-leiko /-oː/ とリトアニア語 viĩko /-oː/ の不可解さはごく自然に説明される（ga-leiko < *-ōd < *-oHd < *-oHed、viĩko /-oː/ < *-ōd < *-ād < *-aHad < *-oHed)。

（よしだ かずひこ）

方言から言語記述を模索する：ドホイ語の音韻を事例として

稲垣 和也

言語の記述には様々なレベルでの抽象化が必要となる。まずは音韻や形態といった部門ごとに見られる変異形を音韻分析・形態分析によって抽象化すべきだが、記述の質／量に応じ、社会言語学的な変異形をも抽象化すべき場合がある。あらゆる種類の変異形を分析することは不可能に近いが、それを進めることによって、言語記述の合理性が高まり、より包括的な記述が達成されるとも言える。

発表者は、インドネシア、中カリマンタンの内陸部で話されるドホイ語カドリ方言を研究しており、「カドリ方言」という一変種の記述をおこなってきた。本発表は、ドホイ語カドリ方言の音韻と、これまで明らかにされていなかったドホイ語西カリマンタン方言の音韻とを対照することで、包括的な言語記述に必要とされる抽象化の一例を示そうとするものである。とくに、西カリマンタン方言の語末声門閉鎖音（例：lio(’)「生姜」）と、語末破裂鼻音（例：uku(d)n「食べ物」）の音声学的・音韻論的分析をおこない、これらが音声的な異音にすぎず、ドホイ語の音韻として記述するのではなく西カリマンタン方言に特有の音声現象として記述するのが妥当であることを明らかにした。その際、それぞれの方言が（類似してはいるが）互いに異なる音韻体系をもつと仮定したうえで共時的分析をおこなうべきだと強調した。あわせて、方言横断的な辞書作成のために、これらが音声的な異音であることを注記しつつも、とりわけ語末声門閉鎖音にたいする母語話者の意識を尊重して実用上の表記をほどこす（例：*lio’*）工夫が必要であることを報告した。また、西カリマンタンには音声／音韻として破裂鼻音をもつ言語が偏在しており（例：Bidayuh、Kanayatn、Mualang）、ドホイ語西カリマンタン方言に見られる破裂鼻音がこれらの言語からの影響と考えられる点を示唆した。

（いながき　かずや）

イロカノ語の複動詞構文の下位クラスと事象の分割

山本 恭裕

本研究では、イロカノ語（オーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語派）の複動詞構文（multi-verb constructions）を対象とし、それらの形態統語と意味、および下位クラスの記述を行った。まず、イロカノ語の複動詞構文は次の特徴から定義される構文のセットであることを示した：複数の動詞を構成要素とする；単節である；動詞間に従属関係がない；表現全体の意味が構成要素と構文の意味から導かれる。イロカノ語においてこうした特徴を満たす構文は移動という一つの意味領域を表現するものに限定されることを示した。

次に、複動詞構文は意味的に三つの下位クラスに分類でき、これらの下位クラスが形式的な制約に関しても異なる振る舞いを見せることを観察した。検討した制約は次の通り：行為者の共有の義務性；被行為者の共有の義務性；複数の項・付加詞への意味役割付与の（不）可能性；場所副詞句の狭いスコープの可能性；複数の移動方向の表現の可能性。さらにイロカノ語の複動詞構文には、一つの事象を表現するものと、複数の個別の事象を表現するものが存在するとみなせることを示した。

（やまもと きょうすけ）

現代日本語共通語における主節末尾の「た」の擬似パーフェクト性

定延 利之

現代日本語共通語の主節末尾に現れる「た」（以下「た」）の意味をめぐっては，「「過去」に加えて，アスペクト的な意味（パーフェクト/完了）を認めるべきか否か」が争点となっている。この点に関して、「アスペクト的な意味を持つ」という肯定説の立場に立ち、その立場に具体的な論拠を与えたのが寺村秀夫氏である。寺村氏は「もう昼飯食べた？」という質問が「食べていない」という（アスペクト的な意味を思わせる）形式で応答可能であることを指摘し、それをもとに「もう昼飯食べた？」の「た」にもアスペクト的な意味を認めるという、「逆算」を展開した。だが、この逆算法が妥当性を欠くということは、既に井上優氏が示されているとおりである。

この論点のもとで扱うべき「た」としては、実は、重要なものが抜けている。それはたとえば、機械が修理されたのは春先のことと知りながら「この機械は去年はずっと壊れてた。でも、いまは直ったよ」と夏頃に言う場合の「た」である。この「た」は（アスペクト的な意味を思わせる）「ている」（「この機械は去年はずっと壊れてた。でも、いまは直ってるよ」）と大まかに換言可能であり、逆算法に頼らず直接にアスペクト的な意味を思わせるものであるが、これまで、その意味を問われてこなかった。

本発表はこのタイプの「た」を取り上げ、(i) この「た」が、「以前はこうだったが、現在はこう」という対比意識に基づいており、(ii) 久しぶりに親戚の子供を見て「大きくなったね」と言うような、鈴木重幸氏が（過去の意味からペルフェクト的なニュアンスが生じているとして）取り上げているタイプの「た」と類似したもので、(iii) 現状の主題表現（上例なら「いまは」）を必須とするという特徴を持っていることを指摘する（たとえば無題の「いま直ったよ」ならこの「た」にはならない）。その上で、この「た」の意味がアスペクト的なものではなく過去であることを明らかにした。

（さだのぶ　としゆき）

古代ギリシア語諸方言に現れる従属接続詞の用例と方言超越的定型表現

南本 徹

古代ギリシア語諸方言に現れる従属接続詞の用例を網羅的に収集する研究は、Hermann (1912) 以来行われていない。古代ギリシア語の方言資料については、形態統語論的な情報による検索が可能な電子コーパスが未だ整備されていないため、現時点で知られている方言碑文を可能な限り網羅し Hermann (1912) を補完する調査には意義がある。また、古代ギリシア語の碑文には定型表現が多くあらわれるが、その中でも方言の境界を超えて分布するような定型表現は、表現する内容を一定に保つことで方言差を浮き彫りにするため、言わばエリシテーション調査に似た研究が可能になる。本研究は、古代ギリシア語諸方言における従属接続詞の用例を収集し、各方言における従属接続詞の用法を確認しつつ、特に従属接続詞が方言超越的定型表現に現れた場合には、その用例の背景を探るものである。

テッサリア方言で目的（‘so that’）を表す接続詞は οὔστε, ὅσκε, ὅπους の 3 つが知られる。このうち ὅπους がコイネーの ὅπως を借用したものであることは明らか（Fohlen 1910: 68）だが、さらに、ὅπους が現れる同じ碑文に οὔστε も 2 度現れることと、「この決議内容が碑文に刻まれるよう、配慮がなされるべきこと」という同じ表現で ὅπως を用いるコイネーの碑文がテッサリアで見つかっていることから、テッサリア方言の ὅπους は接続詞 ὅπως を単独で借用したものではなく、定型表現全体を借用したものと言える。

場所の接続詞（‘where’）εἶ について、Hermann (1912: 251) は、アルゴリス方言とデルポイ方言で様態の意味を発達させたと考えた（「議決されたとおりに……」）。しかし、実際のアルゴリス方言の用例は、場所・時の意味に解すべきである（「議決されたとおりの機会に……」）。

（みなみもと とおる）

トカラ語の文献言語学研究

Adam Catt

『倶舎論』の第 4 章「業品」において、ヴァスバンドゥは 『長阿含経』「Tridaṇḍisūtra」の文句を引用している。この「Tridaṇḍisūtra」は、近年まで梵文が見つかっておらず、またパーリ・ニカーヤおよび漢訳に対応している経典が存在しない。しかし、90 年代の中頃に「Tridaṇḍisūtra」の樺皮写本が発見され、松田 (2006) はこの写本を校訂し出版している。

トカラ語 B の写本 B 543 (Sieg & Siegling 1953:340–341) は、梵文とそのトカラ語訳が記されているが、今までその梵文の引用元は不明だった。そこで発表者は精密な文献調査を行い、B 543 の文句が「Tridaṇḍisūtra」の梵文写本とほぼ完全に一致することが分かった。この発見を伝えることと、詳細な問題点を紹介することが本発表の趣旨である。

（あだむ きゃっと）